HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	会話の発達
Author(s)	仲, 真紀子
Description	2.
Relation	読む書く話すの発達心理学, 内田伸子編著, (放送大学教材), ISBN: 459582162X, pp.19-25
Issue Date	1994-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44814
Type	book part
File Information	YKHS1994_19-25.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

2 会話の発達

会話は，話し手と聞き手がかわりばんこに発話をすることによって成立する。このような相互作用のパタンは，授乳の過程の中にも見い出すことができるという。この章では，会話の発生，発達の過程をみていく。

1. 対話の発生

●相互交渉のターンテイキング

会話の最も基礎にある過程は，互いに番をとりながら進めていく相互交渉であろう。その原初的な形態は，1章で学んだ相互同期性や共鳴動作にも見ることができる。また，授乳の過程にもその一端を伺うことができる。

自分が話し―相手が話し―自分が話し―相手が話すという交替のパタンをターンテイキングと呼ぶ。ケイとウエルズ（Kaye, K., & Wells, A. J.）[1]は，このような順番のパタンが授乳時の母子間にも見られることを発見した。授乳に慣れていない母親は，赤ん坊が乳を吸うのをやめると赤ん坊の頬を軽くつついたり，哺乳びんを揺らしたりして授乳を再開させようと努める。だが，なかなか再開させることができない。赤ん坊は揺すられるとかえって吸うのをやめてしまうのである。だが1週間もするうちに，母親はつついたり揺すったりするだけでなく，その後に休止を入れるようになる。その結果，赤ん坊と母親の間に「赤ん坊が吸うのをやめる―母親はちょっと揺すって休む―赤ん坊が吸い始める」というリズムが見られるようになる。会話に見られる交替のパタンは，ことばが出る前から準備されている。

2. 乳児期の対話

●対話の成立

相互同期性や共鳴動作，授乳に見られるターンテイキングは，無意図的に行われる相互交渉である。だがやがて微笑や見つめ合いによる意図的な相互交渉が始まり，これに音声が伴うようになる。こうなると会話が成立する基礎が整ったことになる。岡本[2)]によれば，対話が成立するには，以下の条件が必要である。

- 音声が意味をになう。
- それが意図的に使用される(意図的道具性)。
- その音声の意味は，自分だけに通ずるのではなく，他人にとっても同一の意味をもっている(協約性)。

1歳前の赤ん坊が「んっ」といって手を出す。すとる母親が抱きあげる。このようなパタンはよく見られるが，そこでは「んっ」が「だっこして」の意味をになっており，赤ん坊はだっこしてほしいという意図をもってこれを使う(意図的道具性)。そして母親は「んっ」の意味を知っており(協約性)，すぐに抱きあげてやるのである。

●テーマの共有

赤ん坊対母親の1対1の対話に，やがて第3の対象が入ってくる。母親にだっこしてもらって外にでた赤ん坊が「んっ」といって指さしをする。そこには猫がうずくまっている。「そうだねえ，ニャンニャンだねえ。」このような第3の対象(テーマ)が含まれるようになると，発展性のある会話が可能となる。

3. 会話の発達

ことばを介しての会話は，どのように発展していくのだろうか。語彙や文法，ターン，テーマや内容の側面から会話の発達をみていこう。

●語彙や文法の獲得

大久保[3]によれば，幼児の語彙は１歳を過ぎるころから爆発的に増加し，就学するころには3000にもなるという。大久保は，一女児を対象とした綿密な調査の結果から，子どもがことばを覚える過程を次のようにとらえている。

表２-１　ことばの発達[3]

乳児期	(1)　ことばの準備期（０歳）
幼児前期	(2)　一語文の時期（１歳ごろ）
	(3)　二語文の時期（１歳半ごろ）
	(4)　第一期語獲得期（２歳ごろ）
	(5)　多語文・従属文の発生（２歳半ごろ）
	(6)　文章構成期（３歳ごろ）
	(7)　一応の達成期（３～４歳）
幼児後期	(8)　おしゃべりの時期（４歳台）
	(9)　第二期語獲得期（５歳台）
	(10)　文字関心集中期（就学前期）

(1)　ことばの準備期（０歳）：さまざまな相互交渉，愛着を形成し，認知能力も増す。「アーン」，「ウーク」などの喃語が増え，音声の獲得がみられる。喃語は７，８カ月のころが最も多くみられる。

(2)　一語文の時期（１歳ごろ）：タータン（自分の名前に近い音），ニャー（そうじゃない），アトゥイ（熱い）など，単語が出始める。

(3) 二語文の時期(1歳半ごろ):「オウチ　ココ」,「モットチョウダイ」,「フチェン(風船)ナイ」など,単語と単語を合わせて文らしきものを作ることができるようになる。

(4) 第1期語獲得期(2歳ごろ):ものには名前があるということが分かるようになり,自分自身が知らないものを知りたいという欲求がうまれる。「ウン」(といって指さしをする),「コレ?」,「ナニ?」,「コレナニ?」といった表現で,ものの名前を聞くようになり,語彙が増える。

(5) 多語文・従属文の発生(2歳半ごろ):「オイシャサン　チクントヤッタ,ココ」のような多語文や,「マタ　ケンカスルカラ　イヤナノ。オウチイカナイノ」というような従属文が見られるようになる。

(6) 文章構成期(3歳ごろ):接続詞などを用い,お話ができるようになる。「ヨウコチャンノ　ハナシ。アノネ。ケンキュウジョニ　イッタラ　イッテラッシャイッテイッタノ。シテネ　カエッテキタッテイウカラネ　アノー　ダカラネ　アノ　オミヤゲ　カッテキタッテ　イッタノ。シタラネ　ヨウコチャンガネ　アノ　オネエチャント　アソンデタノ,ミヨチャント。……」

(7) 一応の達成期(3～4歳):日常生活に支障のない語(約1000)とそれらの語を組み立てる文法形式とを獲得する。

(8) おしゃべりの時期(4歳台):「アノネ」,「ウントネ」,「ソレカラネ」,「シテネ」など,間投詞の多い,接続詞(て)でつないだ長い一発話を話すことができるようになる。

(9) 第2期語獲得期(5歳台):第1期語獲得期では,対象そのものは知っているが名前を知らないので聞く,という質問が多かった。これに対し第2期語獲得期では,大人の話す中にあることばの意味が理解できないので聞くという質問が多い。「アワレッテ　ナニ」,「ハンダンッテ　ナニ」,「ハンソクッテ　ナニ」,「イマ　オネエチャンニ　ナ

ンテ　イッタノ？」,「タマネギハ　ナニカラ　デキタノ」,「ニンゲンッテ　ドウシテ　イキテルノ？」,「ドウシテワカルノ？　リユウヲイッテ」などなど。

⑽　文字関心集中期(就学期)：文字に関心をもつようになる。話ことばはマスターしたかのようにも見えるが,受け身,使役形のまちがい(「ママネ　ヨルネ　オバアチャンニ　オソト　オイダシタ」)や接続助詞,接続詞のまちがい(「オツキサマノ　ハナシ　ヤッテアゲタノ　ソンデ(けれど)　チュマンナイッテ　オヨイデ　ドッカ　イッチャッタノ」)などはまだ多い。

●内容やテーマの発達

語彙や文法が獲得されれば会話ができるようになるというわけではない。話す内容やテーマを構成する力も必要である。初期の会話では目前にあるものがテーマとなることが多い。だが徐々に，時間的，距離的に隔たったものもテーマとして取り上げられるようになる。またごっこ遊びなどでみられる会話も，日常的な活動（ルーチン）を中心とするものから，架空世界を含む発展性のあるやり取りへと変化していく。

同年齢の友達同士（ピア）によるごっこ遊びの例を見てみよう。1，2歳のごっこ遊びはルーチンに基づいているが[4]，1歳より2歳のほうがルーチンの分化がみられる。4歳では「○○なのね」という宣言によって架空の世界が構成されている[5]。この会話では3種類の声色が用いられていた。「○○なのね」の宣言は，通常の音程だが，あらたまった言い方でなされる。役のことばは，それぞれおねえちゃん，おにいちゃん，犬の声で発話される。それ以外の会話（ものを探したり，遊びとは直接関係のない会話）は，普段の声でなされる。

表2-2　ごっこ遊びの発達[4),5)]

1歳半（E：女児，M：男児）
M：ジャー。(母に向かってお茶を入れる。2回繰り返す)
E：ジャー，ジャー，ジャー。(Mにお茶をさいそくする)
M：ジャー。(と言ってEの茶碗に入れる。)

E：（飲むまねをしてから，Mに茶碗をさし出す）
M：オチャー，ウー。（Eの茶碗に入れる）
E：（飲むまねをしてから，Mに茶碗をさし出す）
M：ウー。（と言いながらお茶をきゅうすで入れるまね）
E：（茶碗をさし出し）お茶。（とMにさいそくする）
M：ウー。（と言いながら，お茶を入れるまね）
E：（飲む）
M：（飲む）

2歳半（Y：女児，F：男児）
Y：ねてくださいなー，ねてねー。ねてますねー。
F：（家のうしろで寝ている）
Y：ジャー，ジャー，ジャー，ジャー（独語）。朝です。
F：ん？
Y：もうお湯わかしましたけどね。おつゆはまだにえてませんけどね。
F：（黙ってYを見る）
Y：エト，お茶のんでください。いっぱい，お茶。
F：（お茶をのみに，Yのところに近寄る）
Y：このお茶とかね。
F：あつくないかー？
Y：ぬるいよ。
F：ん？
Y：お水いれたから。

4歳（A：女児，B：女児）［宣言は(宣)，役の発話は(役)，他の発話は(他)］
A：（宣）あるひ，Aは，んーとね，ない，ないている犬をやります。……ここにももっとね……。（笑い）
B：（宣）ねね，仲良しなのね，この犬は。
A：（役）ねえねえ，わんわんわん。

B：（役）今日は遊ばないようにしようよ。
A：（役）うん，ねむたいからね，わんわん。
B：（宣）そしてもうぐっすりねむっちゃったのね，これはね，赤ちゃんの犬ちゃんだから。

……

B：（宣）Bちゃんがもってるのね。おねえさん（B自身のこと）のほうがおとなしいのね，もってたら。おにいちゃん（Aのこと）はさ，わんわーんてほえるのね。
A：（宣）ちがう，おにいちゃん（A自身のこと）の犬のほうはね，あのね，ほえないの。
A：（他）Aちゃんこっち，じゃAちゃん，こう，こっちの袋のほうもつ。
B：（他）だめ。
A：（他）だってAちゃんの犬のほうだもん。
B：（他）じゃあ，はいよ。
A：（役）はい，いぬくーん，ほらほらほら。
B：（役）んー。
A：（宣）おねえちゃん（B）がそばにいたら怒るのね，この，Aちゃんのわんちゃん。(演) ほらほら，わんちゃん。わんわんわんわん！
B：（役）こらー。
A：（役）ごめんね，おれのわんちゃんね，おねえちゃん（B）がだいきらいっていうからねー。ごみんね。ほら，だめでしょう。やったらねー。やったらおにいちゃん（A）怒るからねー。

●参考図書

大久保愛『子育ての言語学』三省堂選書（1987）
岡本夏木『子どもとことば』岩波新書（1982）